を探究し、五月七日を以て和闐に入る。滞留二箇月其附近の故址を討ね、且つ是れより東南に當れるアルチンタッグ高峯探檢の準備をなす。七月三日此地を出發して克里雅河の上流に溯り、海拔一萬數千呎の嶺を越えて西藏高原に入る。徜徉數回、馬疋殆ど死し更に進む能はず、遂に前人未踏の無名嶺を通過して辛うじて十月中旬克里雅に歸還す。是れより東行してチェルチェン、察哈里克を經由し、十二月二十四日甘肅省の燉煌に至り、特に日本より派遣したる吉川小一郎と會す。是れより先、一時橘瑞超の消息を絶てると、支那内地に革命黨の騒亂ありて人心の動搖甚だしかりしに由り、吉川小一郎を派遣し、その踪跡を探らしむ。乃ち吉川は上海、漢口、河南等を經由して明治四十四年十月五日燉煌に至り、四箇月の後、漸く橘に會合することを得たり。明治四十五年二月六日此地を出發して安西に至りしも、支那内地を通過するは危險なるより哈密、吐魯番を經て四月十日烏爾木齊に至り、橘瑞超のみは塔爾巴哈台、賽密巴喇丁斯克を經由し、西伯里亞鐵道に由りて本邦に歸還す。吉川小一郎は留りて更に踏査并に發掘を繼續するに決し、五月五日烏爾木齊を發して吐魯番に至り、故址の探究に從事せんとせしが、暑氣漸く激烈にして勞作に堪へざりしより、高度一万二千呎の地點に於て天山を越え、古城に至り齊木薩附近并に博克塔山中に於て約五十日間を費せる後、烏爾木齊を經由し、八月三十一日を以て吐魯番に歸著せり。是より五箇月餘を故址の探究に費し、大正二年二月十一日吐魯番を發し、喀喇沙爾を經て三月五日庫車に達し、約二箇月附近の克木吐喇、蘇巴什等の故址を探りたる後、拜、阿克蘇を經て烏什に至り、更に北方の山道を經て七月六日喀什噶爾に著す。同月三十日此地を出發し、葉爾羌を經て八月十四日和闐に著す。九月四日和闐河に沿うて北進し、同月二十六日阿克蘇に著す。是れより更に北進し、札木台并に穆肅爾嶺を越え、十月十三日伊犁に達す。十一月二日此地を發して東行し、同二十日烏魯木齊に入る。此地に於て行李の全部を整理し、大正三年一月五日を以て歸還の途に上り、吐魯番、哈密、燉煌を經て二月二十六日肅州に至り、是れより大道を避けて長城外阿拉善山脈の南麓を東行し、鎭番に出で、更に北方の戈壁沙漠に入りて黃河の北方オルドス地帶を東進し、山西省の包頭、歸化城を經由し、五月十日を以て張家口に著す。是れより北京に出で本邦に歸れり。

凡そこの前後三次の探究に於て、予の目的とせし所は一にして止まらず。而もその最も著しきものは佛教東漸の徑路を明かにし、往昔支那の求法僧が印度に入りし遺跡を討ね、又中央亞細亞が夙に回教徒の手に落ちたる爲めに佛教の蒙りし壓迫の狀況を推究するが如き、佛教史上に於ける諸の疑團を解かんとするに在りき。次に此地に遺存する經論、佛像、佛具等を蒐集し、以て佛教々義の討究及び考古學上の研鑽に資せんとし、若し能ふべくんば地理學、地質學